第四百二十三回　青葉会　句会報

令和三年七月二十九日（木）
午后一時半～四時半　於：丸紅カンファレンスルーム

選　者　川口孤舟

出席者　今井紀久男　川口孤舟　久米五郎太　在間千恵　佐藤ただしげ　朱牟田恵洲
長谷見びん　星田啓子　山崎亜也

投句・選句　伊賀山そらお　柿崎忠彦　小早健介　土谷堂哉　豊田ゆたか　中川雅夫　福島正明
古田昇　宮内規雄　山田けい子　山内天牛　渡邊盛雄

選句のみ　安部眞希子　庄司龍平　高橋敏郎　橋口隆　早川允章

《互選句》○は選者の特選　◎は孤舟選者の選

九点　花街に雨の匂へる夏柳　孤舟　（眞・忠・五・た・恵・堂・允・正・啓）

八点　◎さはさはと能登千枚の青田風　昇　（紀・○孤・健・敏・○堂・び・允・規）

七点　向日葵や老いたる医者の閉院す　啓子　（そ・紀・○健・恵・○隆・び・允）
サルビアの燃ゆる沖縄骨拾ひ　盛雄　（眞・そ・紀・五・允・正・昇）

六点　生も死もわづか一文字恋蛍　孤舟　（五・恵・○ゆ・○啓・規・亜）
水の風連れて金魚屋通りけり　仝　（眞・忠・五・た・啓・天）
◎竹橋に句会戻りて夏旺ん　五郎太　（眞・紀・孤・敏・隆・龍）
船旅やギリシャ神話の星涼し　昇　（紀・忠・恵・敏・び・け）
銀河仰ぐ妻なる星を追ひ求め　規雄　（そ・紀・健・堂・け・盛）

五点　湧上がる立志の記憶雲の峰　忠彦　（紀・堂・ゆ・雅・規）
◎初茄子水を潜りて紺新た　堂哉　（紀・孤・恵・健・允）
聟どのも行ける口なり鱧づくし　亜也　（紀・恵・び・昇・啓）

四点　気に入った姉さん被りで草を引く　忠彦　（雅・天・亜・盛）
あぢさゐの毬（まり）色失せしまま悲し　千恵　（紀・た・規・龍）
月下美人咲きしと友の声弾む　堂哉　（た・千・雅・規）
めだか孵る絶滅系の六代目　びん　（○眞・紀・千・盛）
◎底紅や内緒話は直ぐもれる　正明　（紀・孤・○忠・啓）
送り火の消えて思わぬ闇迫る　啓子　（紀・た・亜・○盛）
◎老いの身のさてもさてもの大暑かな　盛雄　（紀・孤・ゆ・龍）

三点　菊之助の白井権八（鈴ヶ森）
殺陣（たて）きめて水も滴る若衆ぶり　紀久男　（敏・雅・正）
スケボーの炎熱払ふ十三歳　仝　（ゆ・正・け）

大夏野片雲のみが遊子たり　孤舟　（五・龍・盛）
◎街路樹の皮みな剥くる極暑かな　五郎太　（紀・孤・け）
炎天に暮らしを覗く鴉をり　びん　（紀・亜・け）
白き歯の若さ涼しくメダル受く　恵洲　（〇そ・忠・五）
江戸風鈴老職人の豆絞り　正明　（眞・允・天）
◎浴衣美人憩ふ夢二の絵のやうに　昇　（紀・孤・千）
生垣に背を割り抜けし蝉の跡　啓子　（紀・ゆ・け）
ビロードの赤き椅子にてソーダ水　けい子　（紀・ゆ・龍）
◎八月やまなうらに生くキノコ雲　盛雄　（紀・孤・啓）

二点

原爆記念日の写真から

死せる子を置いて立去る爆心地　そらお　（紀・敏）
炎熱の五輪よそ目に句座急ぐ　紀久男　（健・隆）
女子天晴（あっぱれ）競泳二冠の笑みまぶし　仝　（〇昇・盛）
中国の壁に風穴夏五輪　仝　（千・正）
荒梅雨に出湯の町は流されぬ　忠彦　（紀・正）
三十年のおんぼろ扇子わが分身　健介　（紀・そ）
父母の記念日この日星祭　千恵　（紀・忠）
荒梅雨や伊豆で痛まし山津波　ただしげ　（紀・雅）
蛸を食べ一休みする半夏生　仝　（隆・天）
唐突に鳴り唐突に罷み梅雨の雷　恵洲　（雅・〇規）
くちなしの匂ひへ散歩の杖向ける　仝　（そ・敏）
大阪が恋しかろうと鱧送る　堂哉　（紀・天）
シルバーのテニス楽しや夏の空　ゆたか　（紀・隆）
無観客を歴史に刻む夏五輪　仝　（び・昇）
朝顔を今朝も数えぬ老二人　雅夫　（紀・堂）
大雷雨世の始りを思えとや　仝　（紀・〇龍）
◎夏痩せの身に抗原を接ぎてきぬ　びん　（紀・孤）
なにはとも聖火点りぬ土用闇　仝　（紀・昇）
◎時々は探偵もする黒揚羽　正明　（孤・五）
蓼科ははや蜩にしぐれおり　啓子　（紀・健）
縁側の足裏（あうら）に熱し夏休み　仝　（千・亜）
黒鯛を狙ひて明治の防波堤　亜也　（び・天）
見上ぐれば驛舎の燕巣立ちけり　仝　（千・た）
片陰に久し振りねと立ち話　けい子　（紀・隆）
無駄のなきすっぴんの日々サングラス　盛雄　（紀・亜）

一点

夏稽古足下雲生の画賛あり　五郎太　（紀）
聖火持つ王長嶋松井の夏　仝　（昇）
萬屋の「お若えの・・」と夏芝居　ただしげ　（紀）
織姫もテルテル坊主や虎が雨　仝　（紀）
嬉しさは双子の卵梅雨明ける　恵洲　（堂）

◎風に吹かれ誘はれ行く蓮見かな　　規雄　（孤）
向日葵を見れば亡き妻思はるる　　仝　（紀）
荒梅雨や出雲の妹に安否聞く　　天牛　（紀）

【句　評】

九点　**花街に雨の匂へる夏柳**　　孤舟　（眞・忠・五・た・恵・堂・允・正・啓）

堂哉さん・・近江俊郎の顔が浮かんできました。
紀久男・・・花街〝かがい〟を〝はなまち〟と読むのは流行歌から出た言い方です。

八点　**◎さはさはと能登千枚の青田風**　　昇　（紀・○孤・健・敏・○堂・び・允・規）

孤舟さん・・能登の白米千枚田は日本の棚田百選、国の名勝にも指定されている。風に戦ぐみずみずしい棚田の青さが光る。
敏郎さん・・句のひびきまで爽やかですね。
堂哉さん・・広々とした緑が目に浮かんできました。青空が広がり、肌に心地好い風。何とも爽快。

七点　**向日葵や老ひたる医者の閉院す**　　啓子　（そ・紀・○健・恵・○隆・び・允）

隆さん・・・向日葵が効いている。老いて閉院しても太陽に向いた治療は永遠に残る。わが知る「荒牧耳鼻咽喉科医院」も閉院して久しい。
健介さん・・・私の場合も永年診て貰っていた老医師が閉院し、別の医院の若き医師を紹介され今に至っているが、実感としてはメリットとマイナス相半ば。

サルビアの燃ゆる沖縄骨拾ひ　　盛雄　（眞・そ・紀・五・允・正・昇）

五郎太さん・・骨拾ひ、強い言葉ですが、沖縄での激戦と、まだ続く遺骨収集をこの暑い夏に思い浮かべました。

六点　**生も死もわづか一文字恋蛍**　　孤舟　（五・恵・○ゆ・○啓・規・亜）

五郎太さん・・想像と思索を促される句です。理屈が恋蛍の艶かしさにつながりました。
ゆたかさん・・上五中七を受けて下五に置いた儚く光る蛍が見事です。
亜也さん・・ホタルの切実さが、締まった句運びで我が身に迫ります。

水の風連れて金魚屋通りけり　　孤舟　（眞・忠・五・た・啓・天）

忠彦さん・・・今、金魚屋を街で見られるのかしら?今も昔も懐かしい風景だと「水の風」から思いました。
ただしげさん・・「水の風連れて・・」涼しそうな金魚売りの声が聞こえてきそうで、上五の表現がよい。
天牛さん・・・どこの街でしょうね！永い間金魚屋を見たことがありません。いゝ機会を得られたものです。

◎竹橋に句会戻りて夏旺ん　　五郎太　（眞・紀・孤・敏・隆・龍）

孤舟さん・・数年間あちこちの句会場を彷徨ってきたが、ようやく新社屋の会議室で句会を行うことが出来た喜び。
隆さん・・・句会と云ったら竹橋、竹橋と云えば青葉会。
龍平さん・・ピカピカのルーム環境が今後句風に影響しますかね?　昨今の若手の青葉会への入会状況も知りたい所です。

紀久男・・・室料が我々としてはやや高いこと、今後の会の継続発展を視野に入れる、など考えれば、現役社員を勧誘していく方向で動く必要もあるか、と思案中です。

銀河仰ぐ妻なる星を追ひ求め　　**規雄**　　**（そ・紀・健・堂・け・盛）**

堂哉さん・・最近訃報に接する機会が多く、思わず涙が浮かんできました。お互いコロナ禍を乗り越えて、笑いあえる日を楽しみに。

五点

湧上がる立志の記憶雲の峰　　**忠彦**　　**（紀・堂・ゆ・雅・規）**

堂哉さん・・入社したころの、胸の高まりを思い出しました。雲に向かって立つという、テレビドラマも思い出しました。

◎初茄子水を潜りて紺新た　　**堂哉**　　**（紀・孤・恵・健・允）**

孤舟さん・・水に濡れた茄子は、一層紺の輝きを増し瑞々しく見える。

四点

あぢさゐの毬（まり）色失せしまま悲し　　**千恵**　　**（紀・た・規・龍）**

ただしげさん・・大きく丸く咲いていたアジサイの花が枯れ、惜しむ気持ちがよく出ている。

月下美人咲きしと友の声弾む　　**堂哉**　　**（た・千・雅・規）**

ただしげさん・・月下美人の花が咲き、友達と歓声を上げている様子が感じられる。千恵さん・・・・一夜のはかない命、それを見つけた時の嬉しさ、そしてそれを誰かに伝えたい気持ち。そんな状況がよく表現されています。

めだか孵る絶滅系の六代目　　**びん**　　**（○眞・紀・千・盛）**

眞希子さん・・つい最近、中学三年の英語教科書で絶滅危惧種の現状を学び、その原因が人間であることを再認識させられた。詠われた「めだか」が元気に育つことを祈ります。

◎底紅や内緒話は直ぐもれる　　**正明**　　**（紀・孤・○忠・啓）**

孤舟さん・・「ここだけの話」は瞬く間に巷に広がるのは世の常。

忠彦さん・・なんとなく面白い。底紅は女性でしょうね。我が家は女性4人なので実感。

送り火の消えて思わぬ闇迫る　　**啓子**　　**（紀・た・亜・○盛）**

亜也さん・・ご先祖が帰っていったあとの突然の闇と静寂。実際の体験としての説得力あり。

◎老いの身のさてもさてもの大暑かな　　**盛雄**　　**（紀・孤・ゆ・龍）**

孤舟さん・・歳を重ねるにつれ、暑さ、寒さへの対応力が衰えてくる。

三点

大夏野片雲のみが遊子たり　　**孤舟**　　**（五・龍・盛）**

五郎太さん・・片雲は〝へんうん〟と読み、ちぎれ雲とのこと。奥の細道の旅情が浮かびます。〝かたくも〟（天の一方の雲）と捉えましたが、これだと味わいにかけました。

◎街路樹の皮みな剥くる極暑かな　　**五郎太**　　**（紀・孤・け）**

孤舟さん・・樹々たちもあまりの暑さに、着ている衣（皮）を脱ぎ捨てなければやってられないのであろう。

ビロードの赤き椅子にてソーダ水　　**けい子**　　**（紀・ゆ・龍）**

ゆたかさん・・洒落たビロードの赤い椅子とソーダ水の取り合わせが絶妙です。

龍平さん・・ビロードにソーダ水　何という組み合わせ　零さんといてや

白き歯の若さ涼しくメダル受く　　**恵洲**　　**（○そ・忠・五）**

忠彦さん・・オリンピックはやはり若い人の笑顔。そして涙。美しいです。

◎浴衣美人憩ふ夢二の絵のやうに　　昇　（紀・孤・千）

孤舟さん・・浴衣姿の美人といえば黒田清輝の「湖畔」が思い浮かぶが、「夢二式美人」も負けずとも劣らない。

千恵さん・・最近の若い女子たちの浴衣の着こなしは全くなってないです！

作者はきっと浴衣を美しく着こなした人を稀有に感じてこう表現されたのでしょう。

◎八月やまなうらに生くキノコ雲　　盛雄　（紀・孤・啓）

孤舟さん・・未だに八月六日・九日の傷は癒えていない。いや、決して忘れ去られないであろう。

二点

炎熱の五輪よそ目に句座急ぐ　　紀久男　（健・隆）

隆さん・・・五輪も気になるものの句会優先。

女子天晴（あっぱれ）競泳二冠の笑みまぶし　紀久男　（○昇・盛）

昇さん・・・不振の水泳陣の中で一人気を吐いた。立派！矯正中の歯もまぶしい。

蛸を食べ一休みする半夏生　　ただしげ　（隆・天）

隆さん・・・毎年、半分白くした葉を眺め、時間を思う。蛸を食す風習も、時間を味わっているよう。

無観客を歴史に刻む夏五輪　　ゆたか　（び・昇）

びんさん・・パンデミックと五輪の同時進行を壮挙と見るか無謀と言うか。とにかく万世に残る歴史伝説となるでしょう。このビッグテーマをどう言う切り口でまとめるか。

「無観客」は確かに上手いキーワードと思います。

◎夏痩せの身に抗原を接ぎてきぬ　　びん　（紀・孤）

孤舟さん・・ワクチン接種を無事終えた安堵感はあるが、炎天下で順番を待つのは、痩せ衰えた老いの身には堪える。

荒梅雨や伊豆で痛まし山津波　　ただしげ　（紀・雅）

雅夫さん・・私は富士市で六年半製紙会社におりました。伊豆、熱海、懐かしく・・この句でいろいろ思い出しました。

父母の記念日この日星祭　　千恵　（紀・忠）

忠彦さん・・ご両親のロマンスが七夕の日たったのでしょうね。素敵です。

唐突に鳴り唐突に罷み梅雨の雷　　恵洲　（雅・○規）

規雄さん・・まさにゲリラ雷ですね。恐いですね。最近の異常気象が思いやられます。

シルバーのテニス楽しや夏の空　　ゆたか　（紀・隆）

隆さん・・・〝あなたーを待つの　テニスコート〟シルバーが眩しい。

朝顔を今朝も数えぬ老二人　　雅夫　（紀・堂）

堂哉さん・・私は紅蜀葵の数を毎朝数えています。朝夕、声をかけて水をかけています。秋口までの楽しみです

大雷雨世の始りを思えとや　　雅夫　（紀・○龍）

龍平さん・・ヒトが定住生活を始めたのは　一万年前位からしい。つまり　500世代前の両親の頃から。俳句が詠まれ始めたのは40世代前から?　温故知新　まだ始まったばかり?

◎時々は探偵もする黒揚羽　　正明　（孤・五）

孤舟さん・・黒揚羽が蜜を求めて花から花へ飛び移る様は、事実を探り歩き回る探偵の姿と重なる。

縁側の足裏（あうら）に熱し夏休み　啓子　（千・亜）
亜也さん・・縁側のない家に暮らすようになって久しく、そう熱かったと懐かしく思い出しました。夏休みの帰省先での体験という解釈もあるかも。
千恵さん・・このところの異常な暑さを最も敏感に体感できるのが足裏だと私もつい最近体験したので激しく同感です。

見上ぐれば驛舎の燕巣立ちけり　亜也　（千・た）
ただしげさん・・昔の田舎の駅舎の様な感じがあって懐かしい。
千恵さん・・・・最近めっきり見かけなくなった燕の巣。見つけた喜びと共に無事に巣立ってくれという気持ちが表れていると思います。

片陰に久し振りねと立ち話　けい子　（紀・隆）
隆さん・・・「片陰で」でなく「片陰に」とした魅力。

一点
嬉しさは双子の卵梅雨明ける　恵洲　（堂）
堂哉さん・・何か得したような、思わずニヤニヤ。
◎風に吹かれ誘はれ行く蓮見かな　規雄　（孤）
孤舟さん・・蓮を渡る早朝の風に誘われ、開花時の「ポン」という音を聴けるかと蓮田へ出掛けてみたが、残念ながら・・・・。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

次回青葉会

八月二十六日（木）　WEB句会　と致します。
当季雑詠５句　締め切りは八月二十五日（水）中とします。今井宛FAXか郵送、星田宛メール（keiko-reve@c07.itscom.net）いずれにでもお送りください。

◙　◙　◙

令和三年七月　青葉会報

一、　炎暑の真昼間、青天に映える新本社ビルの威容にいささかたじろぎ乍ら、神保町駅より歩いて冷房の効いた四階にたどり着きました。社友会事務局の川村さんの案内で会議室へ。机を並べ、ペットボトルまで用意して下さって恐縮しました。句会は６月13日に他界された佐藤来さんの想い出話を話題にしつつ千恵さん寄贈「蓬莱」（飛騨・純吟）小生の「菊正宗」（灘の生一本）、缶ビール、啓子さんの日向夏オレンジピールを賞味。忠彦さんからの会津の大吟醸は次回にしました。いつものように披講は五郎太さんで、ご覧のように孤舟さん、昇さん、啓子さん、盛雄さん等が好成績でした。

二、関係者近詠
立ち枯れも林の一樹若葉光　眞希子
母の辺をひよこら踊る子供の日　仝
太陽と働き終へて炙る鯵　仝
見舞客の賄ひとせむ庭の蕗　仝
舗装路を割る雑草を食ふ毛虫　仝
初節句紙の兜を放さぬ児　陽亮
円熟に遠き半寿や柿若葉　仝
立ち話ここではなにと片陰へ　仝
吉右衛門休演
〃大播磨！〃の掛声届け三社祭　紀久男

ひょいと顔出しては雀隠れかな　弘子
大谷石の石段今宵も蟇の出か　〃
弘法麦ここにも熟れて麦の秋　〃
葉の先の閊（つか）へる湯舟菖蒲の湯　〃

鬼貫の句碑に戯る夏の蝶　盛雄
パリ・コレの衣裳に負けぬ黒揚羽　〃
故里はキリマンジャロか黒揚羽　健介
ダメ虎の慣れぬ高所や夏の蝶　〃
大暑とや老骨意地の草テニス　〃

五月雨や印旛の湖のうす濁り　允章
ぐい飲みのたしかな重み夜の秋　〃

三、孤舟選者主宰の「爽樹」9月号より掲載句

ひと目づつ漁網繕ふ日永かな　年齢に逆らってよし更衣
万緑の宙擦れ違ふロープウェー　蟻の列不要不急の外出か
現世と来世の間蛇の衣

四、日経俳壇7月20日より抜粋

横澤放川選

五輪漂流南瓜の花の祭器めく　吉沢　薫（山口）
我が後に残る本など風入るる　加藤　賢（枚方）
トラックへ落とす入梅いわしかな　金子文衛（東京）
車椅子ベンツと呼びて風薫る　白川　良（京都）
原発のらんるの廃炉青嵐　大井公夫（大垣）

黒田杏子選

語り継ぐ力称へむ沖縄忌　物江里人（柏）
物言はぬガマや沖縄慰霊の日　山崎　晃（東京）
沖縄忌負担は分かち合えるもの　栗山晃（茅ヶ崎）
くちなしの花錆び樺美智子の忌　齊藤眞人（埼玉）

五、日経連載　伊集院静の「ミチクサ先生」より（6月23日）猫の追悼句

此の下に稲妻起きる宵あらん　漱石
先生の猫が死にたる夜寒かな　松根東洋城
吾輩の戒名もなき芒かな　高浜虚子

六、八月七日は丸紅写真部の元部長で團十郎・海老蔵の「助六」、紀尾井ホール邦楽演奏会専属のカメラマンだった新居田政司さんの三回忌でした。永い付き合いでした。ご冥福を祈っております。

令和三年八月十日　紀久男　記

福島の酒蔵復活冷酒（ひや）でやる　紀久男
リウマチのこはばりきつき梅雨入かな　〃

「森の座」（横澤放川選）8月号

パン匂ふ店の小鉢の額の花　紀久男
接種終へ熱中症にあほらしや　〃
フィリピンの小島
南洋の素足の街に「味の素」　〃

「きさらぎ句会」7月